

豚コレラ拡大阻止へ 猟友会奮闘

農家のため…イノシシ捕獲

ワクチン餌 わな設置も

岐阜や愛知などイノシシの経口ワクチン[▼]設置地域で、調査捕獲が狩猟者の大きな負担となっている。感染イノシシが拡大し、設置地域も広がる中、猟友会は重要な役割を担う。しかし、捕獲は防護服を着用した過酷な作業で、今シーズンには熊の遭遇など危険も伴う。専門家は「猟友会に過度な負担を強いる状況は見直す必要がある」と警鐘を鳴らす。

▼一面参照

猛暑の中 作業過酷



▼写真左は豚コレラ対策で防護服を着用し調査捕獲をする狩猟者。右は餌付けする中川さん(左)と篠原さん(岐阜県中津川市)。専門家の狩猟者の指示で、入念な衛生対策の上、撮影しています。

設置は業者や行政職員が請け負う。設置する県内29市町村の多くで人手が不足し、狩猟者には重い負担となっている。

設置は業者や行政職員が請け負う。設置する県内29市町村の多くで人手が不足し、狩猟者には重い負担となっている。

子育て期
餌を求めて
行動活発に

イノシシは初夏が繁殖のピーク。繁殖を終えて数週間たてば雌が子どもを連れて餌を求め、うるつく時期になる。1日現在、豚コレラに感染したイノシシは岐阜で確認されていない。秋口にかけて増える餌を求めて行動範囲を広げる特徴を踏まえ、捕する。

岐阜大学の鈴木正嗣教授は「経口ワクチンを単に散布するのでは効果は見込めず、科学的な知見に基づいた戦略が欠かせない。それに伴い猟友会体制整備が必要だ」と指摘する。

イノシシの経口ワクチン、弱毒化した生ワクチンをカプセルに入れ、トウモロコシの粉などで作った餌に包んだもの。豚コレラウイルス拡散を防ぐため、岐阜と愛知で5月から散布し、7月からは長野、三重、福井でも始めた。ワクチンを散布し、約1週間後に食べているかを確認。その上で、イノシシにウイルスの抗体ができていないか検査を進める。生産者からはイノシシだけではなく、豚へのワクチン接種を求めめる声が出ている。

平均70歳超、人手足りず 岐阜県 中津川市

岐阜県中津川市。山道に登り、イノシシの通るけもの道を見極めながら、同市猟友会会長の中川征児さん(81)が汗を拭く。「消毒や防護服の着脱など普段の狩猟とは異なる工程が多い。炎天下で非常にきつい過酷な作業。少なくとも10人の人手が足りない」と語る。

同市では平均年齢70歳を越す猟友会の15人が経口ワクチンを設置した山

林各地にわなを仕掛け、イノシシの調査捕獲のため点在する山を回っている。今夏に仕掛けるわなは180基、2人1組で、餌付けをするなど準備も重なる。

調査捕獲でイノシシが捕まっていたら、防護服に着替え、銃銃などの刺し、フルシートにぐるみ、軽トラックを駐

う、タイヤや靴などは徹底消毒し、防護服は作業ごとに替える。午前中に30力所程度、各山林のわなを周回し、午後からは車で1時間半以上かかる岐阜市まで捕獲したイノシシを運搬する。この作業を当面は繰り返す。

狩猟者の日当(9000円)はあるが、防護服は通気性が悪く、準備や資料作成も含めて負担が大きい。自らのいたるところ、名乗り出る人はいない。しかも、今シーズンは熊の目撃情報が続出。同市猟友会でも譲って熊がわりにかかってしまった。篠原由夫さん(71)は「捕獲には危険も伴うし、防護服の着脱などは相当しんどい。豚コレラで養豚家が非常に厳しい立場にあり、狩猟者として協力しなければいけない使命感で頑張っている。県と市猟友会は連携しながら経口ワクチン設